

門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

第10回 屋台にかける想い

成田祇園祭では屋台の曳き廻しと共にさまざまな唄が歌われ、祭りに彩りが添えられる。成田駅から新勝寺へと通じる参道の中心に位置し、参詣者や地元の人々にむけた商店が明治時代から軒を連ねていた上町では、佐原囃子による「ラッパ節」に乗せて「壱番町唄」が歌われる。冒頭に次のような一節がある。

『彫り物磨きも楽じゃない
あっちこちと日も暮れる
上じゃ麒麟が笑ってる
磨き疲れて壱番町』

祭りの華である屋台には、事前の準備や整備が欠かせない。それを担うのが若者連だ。筆者が門前町調査でお世話になっている上町の若者連・上町親和会の“楽じゃない”作業の一端を覗いてみたい。

上町の屋台は、昭和30年頃までは分解して薬師堂の軒下に立てかけたり、床下に収め、祭りの前になると釘を1本も使わず、町内の屋台組み立てに詳しい人物の指導を仰ぎ、数日かかりで組み上げられたという。時として部品が余ったり不足したりと、苦労も多かったようだ。屋台は幾度かの改修や屋台蔵の変遷を経て、今では組み上がった状態で収められている。



屋台の上で踊りの稽古

屋台をそばでよく見ると、彫り物や部品の木の色に若干の「濃淡」がある。木の色の濃い部分が改修前の屋台から受け継いだ部品だ。筆者にそのことを教えてくれたメンバーは「色の濃い部分の『彫り』が本当に良いだろ」と自町の屋台が持つ歴史を誇らしげに話していた。

祇園祭に向けた屋台の準備は、おおむね祭りの3カ



屋台作業を行うメンバー

月ほど前から週末を使って行われる。具体的には、前年度の屋台飾りを取り外し、新たな飾りを設えること。「ワッパ」と呼ばれる屋台の車輪から屋根の上まで磨き上げること。足回りに油をさし、ブレーキの調整をすること。引き綱や、下座連が座る座布団を天日干しにすること。スピーカーや電飾など電気系統のチェック。前年度の祭りの後、蔵にしまわれていた提灯や扇子、傘などを取り出し状態を確認。成田の門前では上町でのみ行われる屋台上での踊りの稽古。一から屋台を組み上げる作業こそ現在はしていないものの、作業内容は実に多岐にわたる。2015年の祇園祭に向けた屋台準備も既に着々と進められている。

作業は午前中に集合し通日行われることが多く、眠い目をこすりつつ屋台蔵に集合すると、いつの間にか“あっちこちと日も暮れる”のが常となる。

貴重な週末を楽じゃない屋台作業に捧げる彼らの原動力は、一言で言えば「祭り好き」ということに尽きようかと思う。「祭り好き」という言葉は彼ら自身もしばしば口にする。例えば作業中に誰ともなく祭りの唄を歌い始める様子などに接すると、彼らがどれだけ年に一度の祇園祭を楽しみにしているのかをうかがい知ることができる。

また、調査開始以来、彼らと行動を共にすることで気付いたことがある。彼らの「祭り好き」という気持ちの一端は、実は自町屋台への誇りに裏打ちされているという点である。若者頭以下、新入会のメンバーに至るまで親和会のメンバーは幾度となく筆者に「上町の屋台が一番格好いいだろ」と語ってくれた。冒頭で紹介した壱番町唄の2番に「十町一の図体を見上げて魅せます壱番町」というフレーズがある。彼らには愛する祇園祭で全町内中最も大きな屋台を曳くこと、屋台運行を通し人々を魅了することへの強い自負がある。言ってみれば、屋台は彼らの誇りの象徴なのだ。彼らは作業の度に誇りに磨きを掛けているのである。

(天田 顕徳)

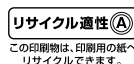
編集後記

中国の故事に、竜門という滝を魚が登ろうとし、コイだけが登り切って竜になれたという話があります。ここからコイの滝登りが立身出世の象徴となり、端午の節句にこいのぼりを掲げるようになりました。ことしもこどもの日には多くのこいのぼりを見掛けました。庭で優雅に泳ぐ姿、ペラペラで必死に泳ぐ姿、公園で仲間と楽しそうに泳ぐ姿。どんなところで泳いでいても、そこには子どもの健やかな成長を願う親の気持ち、そして地域の子どもを地域で見守り、育てる。そんな大人たちの思いが込められているのです。

平成27年5月15日号 No.1291

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。